

桑園

開拓使が山形の藩士を招いて、この地で桑畑を作るように勧めたところから、こう呼ばれるようになった。
現在、桑の木は何本かが残るにすぎないが、JR桑園駅周辺には繊維・服飾に関する会社が今も残っている。

苗穂

昔は自然のわき水のある湿地帯だった。アイヌ語の「ナイ・ポ」「ナイポ」から付けられた名で、「子である川」「小さな川」という意味。

狸小路

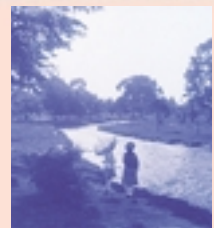
明治時代、この辺りに白首と呼ばれる娼婦が100人以上もいて、歩いている男たちをタヌキのようにだましていたことから、こう呼ばれるようになった。
タヌキがこの辺りに多くいたからという説もある。

薄野

開拓使判官の岩村通俊が官設の遊廓を設置するに当たり、区画地の選定を部下であった開拓官員薄井竜之に任じたため、彼の名にちなんで『薄井の野原』から名付けられたといわれている。
また、測量を行った藤井という人物が、この地に名を残したいと判官に自ら訴えたので、現薄野交番付近（南4西3）に「藤井町」という地名も付けられたようだが、現在は消えてしまった。
ほかに、辺りがススキの原だったからという説もある。

鴨々川

基盤の目の京都をモデルにした札幌の街づくりから、京都の鴨川にちなんで（しだれ柳と旧邸の多い河畔が京都の鴨川の風情に似ている）という説のほか、昔からカモがたくさんいたから、アイヌ語でサケを捕る道具「カモカモ」の名からともいわれている。



昭和10年の鴨々川
(札幌市写真ライブラリー所蔵)

石山通

開拓期の主要道路として、石材や動脈となっていた大通りで、石山から札幌まで馬車軌道が設置されたことから名付けられた。

山鼻

藻岩山のふもとに位置するため、山の端という意味で山端と名付けられたが、後に山鼻の字が当てられた。

札幌は、開拓当初から北海道の中心に位置付けられ、政府の手により整然とした碁盤の目状の街づくりがなされた都市です。明治に入ってから、開拓使の庁舎や官舎、病院や本陣などの公共施設の建設とともに、市街地は京都にならつて区画され、住所を「条丁目」と表すことになりました。

特に、中央区は開拓の中心となる場所であったことから区内ではこの表記が多く用いられています。

しかし、それとは別に、町内会名や学校名などには昔から使われていた地名が現在も残り、中には通称として広く知られるものもあります。

そもそも、札幌の地名は、アイヌ語が基になっているものと日本語のものに分けられます。

市内の重要な地名の多くは前者で、ほとんどが川に付けられたものに由来しています。現在はその音に漢字を当てたものが使われています（札幌・豊平・月寒・琴似・発寒・手稲など）。

後者には、開拓や産業（桑園・石山など）、人名（大倉山・荒井山など）などによるものがあります。